《翻　訳》

エッサ・デ・ケイロース著『マイア家の人々』（1）

—解説および第1章—

尾　河　直　哉

Traduçao japonesa dos *Maias* de Eça de Queirós (1)

NAOYA OGAWA

キーワード
19世紀ポルトガル文学（literatura portuguesa do XIX século）、写実主義（realismo）エッサ・デ・ケイロース（Eça de Queirós）マイア家の人々（Os Maias）

〈解説〉

ポルトガル写実主義の創始者ジョゼ＝マリア・デ・エッサ・デ・ケイロース[1]（一八四五年—一九〇〇年）の作品は、長編小説の『アマーロ神父の罪』（浜崎いとこ訳、彩流社）と『従兄バジリオ』（小川尚克訳、彩流社）、中編小説のうち「大官を殺せ」と「縛り首の丘」（『縛り首の丘』彌永史郎訳、白水社所収）がすでに邦訳されている。だが、エッサ晩年の大作で、作家の集大成であり、かつ畢生の記念碑的な作品にして「ルジアダス以来のポルトガル文学史上最高の傑作」（シモンイス）と評される長編小説『マイア家の人々』（*Os Maias*, 1888）はいまだ日本語に移されていない。この事態を解消すべく、『マイア家の人々』をこれから訳出してゆきたい。

底本には*Os Maias* de Eça de Queirós, o texto integral, Texto, 2. Edição, 2010を用い、フランス語訳（*Les Maia*, traduit par Paul Teyssier, Chandeigne, 1996）、英語訳（*The Maias*, tralnslated by Patricia McGowan Pinheiro and Ann Stevens, Carcanet Press Limited, 1993）、スペイン語訳（*Los Maia*, traducción, prologo y notas de Jorge Gimeno, PRE-TEXTOS, 2008）を適宜参照する。なお、フランス語訳には詳しい注が多数付されていて、たいへん参考になった。

また、エッサ・デ・ケイロースの生涯と文学活動の軌跡、『マイア家の人々』については、フランス語訳の序文による解説が簡にして要を得ている。翻訳に先立ち、〈フランス語訳の序文〉を訳出したい。エッサの紹介と『マイア家の人々』の位置づけに資することと思う。

〈フランス語訳序文〉

ジョゼ＝マリア・デ・エッサ・デ・ケイロースは一八四五年十一月二五日、ポルトの北に位置する小都市ポーヴォワ・デ・ヴァルズィンで生まれた。エッサの誕生にはいささか変則的ところがある。ポント・デ・リマの若い司法官であった父親と、良家の孤児であった母親は、エッサの誕生当時まだ結婚していなかったからである。二人はその四年後に結婚するが、エッサ・デ・ケイロースは私生児として生まれ、この状況が彼の教育に重くのしかかった。誕生と同時に乳母に預けられたエッサは、アヴェイロ近郊の田舎に暮らす父方の祖父母の家に身を寄せ、ポルトの中学校[2]で寄宿生として勉強を始めた。そのとき両親は結婚していたし、ポルトに住んでもいたが、司法官としての立派な経歴を損なう若気の過ちの不都合な証拠を家庭に持ち込むことを望んではなかった。エッサが父親の準正子になったのは、やっと一八八五年になってからである！　この半私生児という状態が、多感な少年の魂にいかに消えがたく深い傷を残したかは想像に余りある。

エッサ・デ・ケイロースの父方の一族は代々自由主義者であった。祖父のジョアキム・ジョゼ・デ・ケイロース・エ・アルメイダも父親と同じく司法官だった。自由主義者の王子ドン・ペドロのために危うく命を落としそうになり、一八二八年には亡命を余儀なくされている。一族の伝統にしたがって、エッサもコインブラ大学で法学を勉強し、法学士（バシャラル）になる運命だった。

一八六一年、エッサは古い歴史を誇るこの大学に登録した。一八六六年までここに在籍している。この五年間にエッサは法律の勉強を少々と他のことをたくさんした。「大学劇場」で芝居を演じ、大いに読書に耽っている。とりわけフランスの書籍を耽読し、フランス語とフランス文学については、最も教養のあるパリジャンにひけをとらない完璧な知識を身につけた。ロマン主義の詩人に熱狂し、エッサにとってユゴーは神であった。ちょうどこのころコインブラ大学の学生のあいだでは、後に「コインブラ派」と称されることになる知的・精神的改革運動が醸成されつつあった。運動のリーダーはアンテーロ・デ・ケンタルとテオーフィロ・ブラーガ。二人は自らの領袖たちに攻撃をしかけた。ポルトガルにロマン主義を永続させる栄光に胡坐をかいた作家たちがその標的である。二人がとりわけ標的にしたのが、なかでも最も尊敬され、最も神聖であったアントーニオ・フェリシアーノ・カスティーリョ。六十がらみの盲目の作家であった。一八六五年、ということはエッサがコインブラ大学在学中に、アンテーロ・デ・ケンタルはカスティーリョにたいして二冊、『良識と良き趣味』および『文芸の品位と公認文学』というタイトルの攻撃文書を放つ。ただ、エッサ・デ・ケイロースはこの闘いにほとんど加わっていない。そもそもアンテーロとカスティーリョの対立は当時混乱をきわめており、年長者の権威を拒絶したあとに新世代がいったいなにをしようとしていたのか、いまだにはっきりしてなかった。この若者たちがリスボンでほんとうに自分たちの綱領を策定したのは、それから数年たってからのことで、そのときエッサは仲間に交じってきわめて重要な役割を演じている。後に見るように、一八七一年のことである。

この一八七一年に向けて、エッサは作家修業を積まければならなかった。法学士（バシャラル）の学位を携えてコインブラを離れると、エッサはリスボンへ行き、「最高裁判所」の弁護士として登録される。しかし弁護士稼業にはあまり魅力を感じなかった。生来自らをジャーナリ

ストと感じており、まずはジャーナリストとして健筆を揮い、新聞『ガゼタ・デ・ポルトガル』で学芸欄を担当した。だが好機がやってくる。小都市エーヴォラで、地方紙『ディストリート・デーヴォラ』なる新聞の編集長をやらないかと持ちかけられたのである。反体制の新聞たれ。これが唯一の命令であった。こうして一八六六年十二月から一八六七年八月までの八か月間、エッサは『ディストリート・デーヴォラ』を全号編集する。論説、他紙記事の要約紹介、署名入りコラム、地方ニュース、フランスの新聞連載小説の翻訳、「農業、商業、工業」のセクションを、エッサはすべてひとりでこなし、「リスボン通信記事」まで書いた。しかも、「リスボン通信記事」は、「わが国の文学通信記事について」で始まる部分と、「わが国の政治通信記事について」で始まる部分に分かれていたのである。そしてこれらどの原稿においても、政府の地域新聞『フォリャ・ド・スル』と果敢に戦った。将来の小説家にとって、いかに恰好な文体練習の場だったことだろう！

一八六七年八月、エッサはリスボンに戻るが、引き続き『ガゼタ・デ・ポルトガル』に学芸欄を書く。そこには、さまざまな題材のエッセー、文学批評から短編小説までが存在した。文章の調子には高揚感と抒情性が漲っていた。当時エッサは、文学に陶酔し、それによって精神的な一体感を共有しようとする若者たちと交流していた。そこから〈同人会〉［文学サークル］が形成されたが、それはしばしば〈『グワルダ・モール横丁』の同人会〉と呼ばれている。この同人会が、当初、グワルダ・モール通りのバターリャ・レイス邸に置かれていたからである。コインブラ以来交流のなかったアンテーロ・デ・ケンタルも、一八六九年から同人会に参加している。エッサは相変わらずフランスの作家を読んでいた。バルザック、スタンダールの他に、テーヌ、ルナン、フロベール、ボードレール、高踏派（パルナシアン）の詩人、アンテーロがエッサに開眼させたプルードンなどである。一八六九年には、「風刺詩人カルロス・フラディック・メンデス」なる人物の詩がさまざまな新聞に発表された。ボードレール臭の強いこれらの作品の作者は、実は、バターリャ・レイス、アンテーロ・ケンタル、エッサ・デ・ケイロースであった。これもまた文体練習だったのである！

この年（一八六九年）の末、エッサはオリエントに大旅行をする。エジプト、パレスチナ、シリアを歴訪し、スエズ運河の開通式にも立ち会っている。若いレゼンデ伯爵ドン・ルイース・デ・カステロ・パンプロナが旅の同伴者であった。リスボンに帰ると同人会のメンバーに再会する。アンテーロ・デ・ケンタルはアメリカに発っていたが、その代わりに、今度は歴史家のオリヴェイラ・マルティンスが入っていた。リスボンにはまた、少し前からラマーリョ・オルティガンが住んでいた。十歳年長のラマーリョは、かつてポルトの中等学学校で数年間エッサを教えていた教師である。以降、ラマーリョはエッサの信奉者にして相談相手、そして腹心の友となった。エッサが一八七〇年に新聞を使って企てたかの有名な韜晦は、このラマーリョとの共同作業である。七月二四日から九月二七日にかけて『ディアリオ・ノティーシアス』紙が「シントラ街道の謎」というタイトルで、匿名の相手から受け取ったと称する物語を発表した。波乱に富み、劇的効果と死体と思いがけない展開に満ちた話だが、本当の作者はラマーリョとエッサであった。またもや文体練習だったのである！

だが、将来をまじめに考えなければならない時がやってきた。一八七〇年、エッサ二五歳。弁護士稼業は意に染まず、文学もジャーナリズムも正業にはなっていなかった。領事職につくため、外務省の試験を受けたのはそのときであった。エッサは第一位で受かった。しかし、将来の官吏としての「経歴」に箔をつけるために、この時期、一種の行政研修を受けている。一八七〇年七月から一八七一年六月まで、エッサはレイリーア「郡」（コンセーリョ）の「行政官」（アドミニストラドール）を勤めているが、これはフランス風に言えば、レイリーアという小都市の副

知事といったところである。はたして良い副知事だったのだろうか？　詳細はわからない。だが、エッサが地方の風俗を仔細に観察して記憶にとどめることができたことは間違いない。というのも、初の長編小説『アマーロ神父の罪』はこのレイリーアで物語が展開するからである。

文体練習の時代は終わった。抒情的にして風刺好き、韜晦趣味のあった初期のエッサは、自らの方法と目標と手段を意識した作家に席を譲る。一八七一年を境に、エッサはポルトガル「写実主義」小説の理論家にして領袖となる。

というのも、アンテーロ／カスティーリョ論争のときにはまだ漠然としていた「コインブラ世代」の潮流がその形を顕し、明確になってきたのが一八七一年だからである。この新流派についてまともに喋々できるようになり、世代間の対立が十全な意味をもつようになったのがこのときであった。この新流派の先陣を切っていたのがアンテーロ・デ・ケンタルであることはコインブラ時代と変わらないが、その脇を固めていたのが今度はラマーリョ・オルティガンとエッサ・デ・ケイロースであった。ラマーリョとエッサが編集する風刺雑誌『刺し槍（アス・ファルバス）』が一八七一年の五月に創刊され、翌月、アンテーロがグループの主義主張（ドクトリン）を明確にした「リスボン会館連続講演会」が開催される。

都合五回開かれた連続講演会だが、そのなかで最も重要なものは、アンテーロ・デ・ケンタル自身が行った第二回講演と、エッサによる第四回講演である。第一回講演でこのグループの目標は、ポルトガルを現代世界の潮流に乗せることに他ならないとぶち上げたあと、アンテーロは第二回講演で「イベリア半島民が衰退したさまざまな原因」を問題にする。政治的であると同時に経済的でも知的でもあったこの衰退は十七世紀に始まった。アンテーロによれば、それはおもに次の三つの原因に帰せられるという。反宗教改革以来の教会の態度、絶対主義王政、植民地支配である。この衰退三原因と正反対の方向へ進むこと、すなわち、現代的精神、民主主義、進歩の軌道にイベリア半島の人々を乗せること、これを旨とする真の革命がどうしても必要なのだ、とアンテーロは説く。

しかし、第四回「リスボン会館講演会」が最も興味深い。エッサがそこで「新文学」すなわち「芸術の新たな表現としての写実主義」という主題を扱っているからである。あらかじめ原稿を用意せず自由に話したため、残念ながら講演内容を知ることはできない。しかし、当時のポルトガル文学界の厳しい批評から察するに、エッサはそこで、プルードンやテーヌから借りてきた着想を奇妙に混ぜ合わせたものを「写実主義」と呼び、その指針を展開したようである。新しい文学は社会的機能を有し、進歩に貢献するものでなければならないとする。同時に、エッサは（テーヌ流の）決定論を信じており、科学を信奉していた。したがって、新しい文学の方法は生理学や遺伝などに基づいた科学的なものでなければならないと主張している。これは、この時期のゾラの主張と同じである。エッサはこのときすでにゾラを、とりわけ自然主義の「科学的」原理が詳細に述べられた『テレーズ・ラカン』第二版（一八六九年）の序文を読んでいたのだろうか？　確かなことはわからない。いずれにせよ、この時期に、とりわけフランス自然主義の思想の精髄が盛られた主義主張（ドクトリン）を公言していたことにかわりはない。それがエッサ言うところの「写実主義」であった。その後はゾラの権威に訴えかけ、これを「自然主義」と呼んでいる。したがってエッサはひとつの主義主張（ドクトリン）を手にしていたわけで、あとはそれを実践に移すだけだった。そして事実その後、それを実践してゆくことになる。

とはいえ、領事という仕事柄、エッサは故国を遠く離れることが多かった。まずはハバナ。ここには一八七二年から一八七四年まで在住している（ただし、一八七三年にはアメリカ合衆国とカナダへの長期旅行でハバナ在住は途切れている）。エッサは仕事熱心な官吏で、キューバの大農園主から搾取された中国人移民の保護に尽力

し、そのレポートは当時リスボンで注目を浴びた。一八七四年から一八八八年にかけては在英ポルトガル領事を、最初はニューカッスルで（一八七四年―一八七四年）、次いでブリストルで（一八七八年―一八八八年）勤めた。ところが今度は仕事に飽きてくる。俸給が安いため暮らしはかつかつで、しかもイギリスの気候がつらい。創作に没頭しては気を紛らわすのだった。ブリストル滞在の終わりころ（一八八六）、エッサはエミーリア・カストロ・ポンプローナと結婚する。レゼンデ伯爵夫人の娘で、オリエント旅行に同行した旧友の妹である。レゼンデ家はポルトガルで最も新正の貴族に属していた。著名な作家エッサは、資産家になった。一八八八年、パリの領事職が空席になり、エッサはそのポストを手に入れ、死ぬまでパリに留まることになる。エッサが一九〇〇年八月十六日に息を引き取ったのは、ヌイイ、ルール大通りのアパルトマン（三八番地）であった。

さて、一八七一年のリスボン会館の講演で「写実主義」派の理論を表明して以降エッサ・デ・ケイロースが世に問うた作品を検証することにしよう。この年以後、エッサは、「写実主義」派の理論を適用したともいえそうな長編小説を二編ものしている。『アマーロ神父の罪』[3]と『従兄バジリオ』〔邦題『逝く夏〈プリモ・バジリオ〉』[4]〕である。三つの版（一八七五年、一八七六年、一八八〇年）を有する『アマーロ神父の罪』は小都市レイリーアのカトリック社会をわれわれに垣間見させてくれる。若い娘を誘惑し、己の罪によって生まれた子供を殺すという物語。あれこれと取り沙汰されてはきたが、この小説とゾラの『ムーレ神父の罪』とはなんの関係もないと推定される（そもそも、『アマーロ神父の罪』の第一版はゾラの小説より先に出版されている）。『従兄バジリオ』（一八七八年）はリスボンのブルジョワ社会で物語が展開する。ヒロインのルイーザは、暇をもてあまし、想像力がたちまち過熱する若い娘。ポルトガル版エンマ・ボヴァリーであるルイーザは、容姿端麗の従兄バジリオと組んで夫を欺く。ところが従兄はルイーザを捨てる。そしてルイザは、秘密を知る女中から夫にばらすと脅迫され、惨めな人生を送るというもの。

この二小説はリスボン会館の連続講演で表明された主義主張（ドクトリン）に合致している。社会的現実の冷静で「科学的な」観察、決定論の信奉、そしてプルードン風の「道徳的な」主張まで、そこにはすべてがある。『アマーロ神父の罪』は独身を託つ神父の危険を、『従兄バジリオ』は娘の誤った教育と暇をもてあました妻の危険を明らかにしていないだろうか？　だが、「写実主義」（「自然主義」と言っても同じだが）の諸原理がこの作家にあまりに重くのしかかり、それに忠実であらんがためにかなりの無理をしていることが、さまざまな証拠からすでに看取できる。たとえば『アマーロ神父の罪』（とりわけその第二版）において、エッサの反教権的な情熱が、いささかも「科学的」でない憎しみを作中人物に吹き込んでいるし、『従兄バジリオ』には、皮肉な笑みを誘うように造形された人物像が複数存在する。たとえば忘れがたい助言者アカッシオなど、ポルトガル版のジョゼフ・プリュドム、あるいはピックウィックと言ってよい。

したがって一八七八年以降、自然主義的感興がこの作家において枯渇していたとしても驚くにはあたらない。「実生活情景」と題された一連の短編小説の計画が突然頓挫する。エッサが『マイア家の人々』[5]の主題を構想したのはこの時であった。このタイトルが表れたのがまさに一八七八年、「実生活情景」第十二景のタイトルである。次いで『マイア家の人々』は独立した長編小説になり、『ディアーリオ・デ・ポルトガル』紙が、一八八〇年に次の連載小説としてこの『マイア家の人々』を予告している。しかし、長編小説が書店に並ぶのが一八八八年だから、エッサがこれを完結させるまでに八年間もかかったことになる。

こうした計画の頓挫、躊躇、遅筆は、エッサの芸術がこのときこ

うむっていた変化を如実に物語っている。もっとも、この時期にエッサは、自然主義のいわば対極にある作品をふたつ発表している。『代官を殺せ』[6]（一八八〇年）と『聖遺物』[7]（一八八四年執筆、一八八七年出版）である。『大官を殺せ』は、フランス経由でブリストルのポストを取り戻そうとしていたエッサが逃げ場を求めてやってきたアンジェの白馬ホテルの一室で、数日間で書き上げられた。ボタンを押すと中国の果てから人を殺すことができるという、良く知られた大官のテーマを下敷きにして書かれた幻想的な短編小説である。内務省の小役人テオドーロが、悪魔じきじきの誘いに応じ、職場の事務所でボタンを押す。すると大官は死に、テオドーロは莫大な富を相続する。しかし、良心の呵責に苛まれ、不正な手段で手に入れた財産を最後には放棄し、再び内務省に職を得る。そんな話である。いっぽう『聖遺物』は茶番劇というか短い笑話。テオドーロは信心に凝り固まった老叔母の遺産を待ちわびる哀れな若者で、叔母の歓心を買おうと、信心者のふりをし、贖宥と聖遺物を求めると称して聖地に大旅行をするという話である。ただ、この礼を失した〈茶番劇〉にキリストの受難物語を挿入しなければならないとエッサが信じていた点が何としても悔まれる。

『大官を殺せ』の第五版からは、エッサが「『ルヴュ・ユニヴェルセル』誌編集長」宛てにフランス語で書いた一八八四年八月二日付の手紙が付されているが、そこにはこう書かれている。『大官を殺せ』は「近年の分析的かつ実験的なわが国の文学潮流から著しく乖離していますが、しかしながら、この作品が現実ではなく夢に属し、また観察されたものではなく発明されたものであるというそのことによって、むしろ、ポルトガル精神のより自然で自発的な傾向を忠実に描き出していると私は考えています」。またその先では、「地味な形式で表現された的確な思想に、わたしたちはほとんど興味をそそられません。わたしたちを魅了するのは、言語の豪華絢爛たる造形によって表出される並外れた感情なのです」と書かれている。エッサ・デ・ケイロースその人がこうむった変化を言い当てるのに、これ以上の言葉はないだろう。ポルトガル自然主義の領袖は、自らに課した枠組みに息苦しさをおぼえ、幻想や皮肉や美文に夢中になっていたのである。

『マイア家の人々』を書いたのはそんなおりだった。一八七八年に企画され、一八八〇年に予告されたこの長編小説が、一八八八年になるまで最終的な形にならなかったことはすでに述べた。この小説の制作と印刷は波乱の連続であった。『ディアーリオ・デ・ポルトガル』はエッサが一八八〇年に連載小説の形で発表することになっていた新聞で、その編集長であり友人のでもあるロウレンソ・マレイロにまずは約束がなされていた。次いで、リスボンの印刷所ティポグラフィア・ラレマンが一巻本の印刷を開始。二七二ページ（すなわち八つ折り版葉紙十七枚）で五千部が刷られている。この本は一八八三年、ポルトのシャルドン書店によって買い取られ、作品の残りの部分が印刷された。しかし、エッサはこの長編をすでに数年かけて書き足し、見直し、推敲していた。

というのも、『マイア家の人々』がエッサの文学活動の頂点を示す作品であることは言を俟たないからである。エッサはこのとき四十代。狭い意味での自然主義からは自由になっていた。自身の表現を用いるなら、エッサはこの小説に「手持ちのすべて」を投入した。小説では、すでに古くなったふたつの文学的潮流を代表する人物が論争する場面に遭遇する。ロマン派の詩人アレンカールと自然主義の擁護者ジョアン・ダ・エガである。エッサは今や、このふたりのいずれにも肩入れしていない。エッサの文体はポルトガル人につねに愛されてきたあの「言語の豪華絢爛たる造形」を追求しながらも、師と仰ぐフランス作家たちが教える明晰さ、正確さ、秩序正しさにたいする忠実さを失っていない。また物語のリズムには、イギリスの作家を思わせる、どこかゆったりともの静かで豊かなものが感じられるだろう。というのも、忘れてはならないが、この本は

ブリストルで、もう何年もまえから故国に住んでいない男によって書かれているからである。この男がこの本に吹き込む感情は、複雑で矛盾に満ちていた。そこには、ポルトガルの太陽、甘い米（アロス・ドセ）、ドウロ川流域の農園付き別荘（キンタ）の静かで豊かな生活にたいする郷愁があるが、それ以上に、ポルトガルの暮らしの偏狭で、旧弊で、しみったれたところが敏感に感じられるからである。世界を旅し、ヴィクトリア朝イギリスの堂々たる繁栄を目の当たりにしてしまうと、ポルトガルの政治、社会、知の現状には嫌味を、少なくとも皮肉のひとつも言いたくなる。歴史的な出来事にたいする言及や風俗の描写のなかに、哀れみと反発、美化と風刺のあいだをつねに揺れる動きがあらわれるのはそうしたわけである。エッサの同時代人は、とりわけ風刺に敏感だった。小説の作中人物のなかにこうした同時代人の面影がしばしば認められる。至極滑稽であると同時に人の胸も打つ詩人アレンカールは当時の二大文学者の主要な特徴から借用しているが、遅れて来たロマン主義者ブリャン・パートとピネリェイロ・シャガスこそその二人である。第二巻第六章に描かれたチャリティー・パーティーには、「手がかり（ペルソナージュ）を与えてくれる人物（アクレ）」が多数登場している。この場面を書いているとき、エッサは、一八八〇年四月二八日にトリンダード劇場で参加したあるパーティーを思い出していたからだ。他にも、こうした例にはこと欠かない。

だが、この長編小説がわれわれに知らしめてくれる人物は、とりわけエッサその人である。本が世に出たとき、エッサはすでに半私生児でもなければ、すでに見たような安給料の官吏でもなく、貴族レゼンデ家と姻戚関係を結んだ裕福な人物であった。エッサが描こうとしていたのは、まさに、自らが属することを誇らしく思っている貴族と大ブルジョワの世界である。社会的に有利な地位がエッサに与えた誇りが、いくにんかの作中人物の理想化をおそらく説明してくれるだろう。自由主義的な貴族であり、威厳と「気骨ある男」の典型であるアフォンソ・ダ・マイア。そしてとりわけ、エッサの「見事な」分身であり、気品、教養、洗練において自らの理想であるカルロス・ダ・マイアがそれである。もうひとり、ジョアン・ダ・エガという忘れがたい作中人物も作者に多くを負っているにちがいない。だがジョアン・ダ・エガがエッサを表現しているにしても、それは、自らに皮肉な分析を加えることによってである。その痩せた体躯、片眼鏡、才気煥発、悪魔のような風貌。自然主義の信奉者であることを公言している点。すべてが若いころのエッサを思わせる。批評家が喜んで指摘し、エッサとの類似を浮き彫りにする細部さえ存在する。エッサはコインブラ大学の学生時代、ジョアン・ダ・エガのように「原子にかんする覚書」を書こうとしていたし、若い「行政官」としてレイリアに滞在中、キューピットの仮装をして参加した仮面舞踏会でサルゲイロ男爵なる人物のサロンの戸口に立ったことがある。男爵夫人にしつこくつきまとうためであった。これが『マイア家の人々』第九章で語られるアヴァンチュールの「ネタ」であることはいうまでもない。

しかし、小説家というものは自らの深いパーソナリティーを隠すために、あるいは少なくとも偽装するためにそれをわざわざ暴露することがよくある。エッサ・デ・ケイロースの見事な分身であるカルロス・ダ・マイアが経験するドラマ、すなわちあの禁じられた悲劇の愛は、作者の密かな心の傷を露わにしていないだろうか？　愛にかかわることが、子としての情愛までも、まず罪の色に染め上げられている半私生児の苦しみであったエッサ自身の苦しみを反映してはいないだろうか？　そればかりか、カトリック教育がエッサに残した消し去ることのできない痕跡をそこに見つけることができないだろうか？　その解釈がいかなるものであるにせよ、エッサが当時抱懐していた深淵な哲学の全体を『マイア家の人々』が表現していることにかわりはない。このテーヌの弟子にとって、天は空虚であり、人生は無意味であった。かつては科学やプルードンやゾラを信じることができた。ところがもはやそれらを信じることはできな

い。エッサは、母国を苦しめる悪の数々を明敏に見通していたが、それを救う策は試みていない。要するに、社交界の人士であり、ディレッタントだったのだ。エッサの眼から見て価値を持つものは「芸術」だけであった。「芸術がすべてである。なぜなら、芸術だけが生き続けるからだ。他はすべて虚無にすぎない」。『現代にかんする覚書』のなかにそう書いている。

一八八八年以降、エッサはパリの領事であった。家庭の父親であり、財産所有者であり、高名な作家であったエッサは、安逸と栄光に安住していた。『カルロス・フラディック・メンデスの書簡集』を発表したのはそのころである（一八八八年—一八八九年）。この想像上の書簡集の作者はもはや、一八六九年にボードレール的な詩の作者とされていたあの「風刺詩人、カルロス・フラディック・メンデス」ではなく、エッサの新たな理想を見事に代弁する洗練された一種の社交人であった。年を追うごとに、エッサの才能は官僚的、体制順応的、保守的といってもよい色合いを濃くしていった。ヌイイの自宅で『名高いラミーレス家』（一八九七年）と『都市と山』（一九〇一年、死後出版）を書きながら、古いポルトガルに心を動かされると同時に文体の鏤刻を推し進めたが、その洗練は読む者をうんざりさせるまでになっていた。

エッサ・デ・ケイロースはポルトガル文学とブラジル文学の歴史に圧倒的な影響を与え、言語にまでその影響を刻印するほどであった。一八九八年のスペインの人々はエッサに多くを負っている。主要作品はいくもの言語に訳され、今日では世界的に知れわたっている。この『マイア家の人々』の仏語訳を通じて、ヨーロッパ文学の傑作をフランス語の読者に紹介することが急務であったのは、以上のような理由による。

〈翻訳〉

マイア家の人々

第一章

マイア家の人々が一八七五年秋に移り住んだリスボンの家は、サン・フランシスコ・デ・パウラ通り[8]近辺とジャネラス・ヴェルデス地区では、花束（ラマリエーテ）の家、あるいはたんにラマリェーテという名でとおっていた。田舎屋敷風の涼やかな名前にもかかわらず、ラマリェーテは厳めしい壁の大きく陰鬱な家で、二階の細長いベランダは鉄柵をめぐらし、その上には屋根庇に守られた小さな窓がおずおずと並んでいて、ドナ・マリア一世[9]治世下の建築物に特有の教会風邸宅がもつ物悲しい風情を湛えていた。屋根に小さな鐘と十字架を頂いているため、さながらイエズス会の修道院である。花束（ラマリエーテ）という名前はおそらく四角い彩色タイル（アズレージョ）に由来するのだろう。いちども家紋の置かれることのないスペースに嵌めこまれていたそのアズレージョには、リボンで括ったひまわりの大きな花束が描かれていたからである。リボンには文字と日付がはっきり読み取れた。

ラマリェーテは長年住む人もなく放置されていて、一階の小窓にはめられた格子には蜘蛛の巣が張り、荒廃の色を濃くしていた。一八五八年には、教皇聖下の使節ブッカリーニ猊下が、屋敷の教会風な荘重さと界隈の眠るような静けさに惹かれてここを訪れ、教皇大使館を置こうとしたことがある。猊下は屋敷の内部も気に入っていた。部屋の配置も、羽目板で装飾された天井も、壁がフレスコ画で覆われ、そのフレスコ画に描かれた花輪の薔薇とキューピッドがすでに褪色しはじめているところも好きだった。だが、ローマ高僧の豊かな生活習慣が抜きがたく染みついていた猊下は、屋敷に木立と水に恵まれた豪華な庭園がないではいられなかった。しかるにラマ

リェーテには、煉瓦を敷いたテラスの奥に、手入れをしていない荒れた貧弱な庭があるばかり。そこには生え放題の雑草を別にするとイトスギが一本、ヒマラヤスギが一本、小さな涸れ滝と満杯の水槽がひとつ、野生の枝葉からぽとりぽとりと滴り落ちる夜露で端の黒ずんだ大理石の彫像が一体（猊下はそれがキティラ島のヴィーナスだとすぐに気づいた）あるだけだった。しかも、マイア家の管理人大ヴィラサの示した家賃はとんでもない金額に思えた。猊下はほほえみながら、いまだレオ五世の御世の教会とでもお思いかと問うたが、ヴィラサは、とすると猊下は、今がジョアン五世[10]の御世ではないとでもお考えでいらっしゃいますか、と切り返した。こうしてラマリェーテは引き続き住む人のないのままになってしまった。

この荒れ果てた益体もない屋敷（亡き父親の後を継いでマイア家の管理人になった息子の小ヴィラサはそう呼んでいた）は、一八七〇年が終わるまで、ベンフィーカ[11]にある一族の大邸宅から運び込まれた家具・瀬戸物類をしまっておくためだけに使われ、ほとんど歴史的存在になっていたが、数年間売りに出されたのちに、ブラジルのある聖職禄受給者によって買い取られた。そのさいマイア家のもうひとつの地所であるア・トロジェイラも売却された。一族のことを覚えていて、刷新運動（レジェラサオン）以来[12]ドウロ川流域にあるサンタ・オラーヴィアの農園付き別荘（キンタ）に引っ込んで暮らしていることを知るリスボンでも数少ない人々のなかには、一族が経済的な苦境に陥ったのではないかとヴィラサに問う者もいた。

「まだパンには困っておりませんし、パンに塗るバターにも困ってはおりません」と、微笑みながらヴィラサは答えたものだった。

マイア家は古くからベイラ地方に住む、代々傍系も親族もない少人数の一族で、今では男ふたりだけになっていた。もはや前世紀の遺物ともいうべき年老いた家長アフォンソ・ダ・マイアと、コインブラ大学で医学を学ぶ孫のカルロスのふたりである。アフォンソがサンタ・オラーヴィアにすっかり引きこもったとき、収入はすでに五万クルザードを越えていたが、その後二十年間の田舎暮らしで蓄えが増えてゆき、しかも、一八三〇年以来ひとりナポリに住み、古銭学に打ち込んでいた唯一の縁者セバスチァン・ダ・マイアからも遺産が入ってきていた。マイア家とそのパンの話になると、一族の代理人が余裕の笑みを浮かべることができたのは、おそらくこうした事情によるのだろう。

トロジェイラの売却は事実上ヴィラサの進言によるものだった。しかし、そのヴィラサも、アフォンソがベンフィーカの邸宅を手放すことには賛成しなかった。壁が一族の不幸を見てきたから、というのである。壁というものの宿命です、とヴィラサは言ったものだ。というわけで、ラマリェーテに住む人がいない今となっては、マイア家がリスボンにもつ家は一軒もなくなってしまった。アフォンソは歳が歳だけに平穏なサンタ・オラーヴィアを愛していたが、パリやロンドンで休暇を過ごしていた孫の方は、大学卒業後、ドウロ川流域の切り立った岩山なんかに引きこもりたくないと言った。そこでアフォンソは、カルロスがコインブラを後にする数か月前、ヴィラサの驚くことを口にした。ラマリェーテに住むことにした、というのである。代理人は長い報告書をしたため、図体の大きなその家の不便不都合を論（あげつら）った。とにかく、あれこれ修理が必要で出費がかさむ。それに庭がない。樹木豊かなサンタ・オラーヴィアから出て来た者にはさぞかしつらかろう、と書いた。挙句の果てには、「ヴォルテールやギゾーその他の自由思想家といった、今世紀のあのくだらぬ輩どもの名を挙げる恥を忍んでまでも」（と、もってまわった言い回しを付け加えて）ラマリェーテの壁がマイア家の人々にいつも不幸をもたらしてきたという言い伝えにそれとなくふれた。

アフォンソはこの言い回しに大笑いし、なかなか大層な理由だ、だが、わしは代々受け継いできたわが家の屋根の下に暮らしたいと言っているにすぎない、もし工事が必要ならすればいい、しかも

大々的に、言い伝えや縁起がなんだかんだ言うのなら、窓をめいっぱい開いて陽の光が射し込めるようにすればそれでじゅうぶんだろう、と返事をした。

それは「閣下」の命令だった。その冬は雨が降らなかったこともあり、ヴィラサの代父でもあり、また政治家にして建築家でもあったエステヴェスとかいう男の監督のもと、工事がすぐに始まった。この芸術家は階段を豪華にし、ギニアとインドの征服を表す彫像を両側に置くというプランでマイア家の管理人を熱狂させた。食堂には陶製の小さな滝を置く予定までしていた。ところが、カルロスが、建築と室内装飾を専門とする男をロンドンから連れて思いがけずリスボンに姿を現した。そして装飾と素材の色調を一緒に急いで吟味すると、ラマリェーテを囲む壁の工事を男に任せ、カルロスの趣味どおり、知的で控えめな豪華さの漂う快適な内装にしてしまったのである。

自国の芸術家がないがしろにされて、ヴィラサは苦々しい思いをした。エステヴェスはポルトガルが負けたこの政治的結託に遠吠えを浴びせかけた。アフォンソもまたエステヴェスが仕事を辞めてしまったことがかえすがえすも残念で、ぜひとも家の馬車庫を造ってもらえないかとまで頼み込んだが、その依頼が受け入れられたのは、芸術家が民政長官になってからのことである。

一年のあいだカルロスはちょくちょくリスボンに帰ってきては「美的な仕上げをする」ために作業を手伝った。一年間の改修工事が終わると、旧いラマリェーテの名残を残すものは、家の顔だからとアフォンソが改修をいやがったもの悲しい正面（ファサード）だけになっていた。ヴィラサは躊躇なくいいはなった。ティー・ポット・ジョーンズ（ヴィラサはこのイギリス人を英語でそう呼んでいた）は、ベンフィーカの骨董品まで利用して、無意味な出費をせずにラマリェーテを「博物館」にしたと。

まず驚いたのはその中庭（パティオ）だった。かつては砂利を敷き詰めただけで飾るものもなく、あれほど寒々として陰気だった中庭（パティオ）に、今では紅白の大理石が格子状に敷かれ、植物が飾られて、カンペール陶器の壺と、カルロスがスペインから持ち帰った豪華なベンチが置かれている。木彫が施されたそのベンチは、大聖堂の聖歌隊席のように荘厳であった。中庭（パティオ）の上の控えの間は刺繍を施したオリエントの織物でさながら天幕のように覆われ、足音も響かない。ペルシャの敷物で覆ったソファが部屋を引き立て、モーロ風の大きな皿は銅のような金属性の輝きを放って簡素ななかにも気品を漂わせていたが、その部屋では、微笑みながらかわいらしい足先を水につけてはみたもののその冷たさに震える若い娘の像が、純白の大理石を背にくっきりと浮かび上がっている。そこからは広い廊下が伸びていて、廊下にはゴシック様式の長持ち、インドの花瓶、古い宗教画といったベンフィーカの宝物が飾られていた。ラマリェーテのなかでもいちばん素晴らしいいくつかの部屋がこの廊下へとつながっていた。めったに使われることのない貴賓室は、秋苔色のビロードのブロケードで全面覆われていて、そこにはジョン・コンスタブルの美しい絵が飾られていたが、それはアフォンソの姑ルナ伯爵夫人が、霧の立ち込める風景を背に、英国人が狩りに着てゆく緋色の服を身に着け、羽毛のトリコルヌ帽をかぶった姿で描かれた肖像画であった。脇にはこれよりも小さな部屋があった。音楽を演奏するための部屋で、金をあしらった家具調度と枝葉模様の輝くシルクが十八世紀的な雰囲気を漂わせている。灰色に褪色したゴブラン織りのタペストリーが壁を牧童と木立で覆っていた。

その向かいにあるのが、ティー・ポット・ジョーンズが持ってきた現代風の皮革を張ったビリヤード室で、伸び放題の枝葉のように散らかった緑の瓶のあいだを銀メッキした白鳥が羽ばたいていた。そしてその脇には、ラマリェーテの部屋のなかでいちばん心地よい「喫煙室」があった。寝椅子（オットマン）はベッドのようにふかふかで大きく、緋色と黒の刺繍を施した織物の醸す暖かく少し侘しい雰囲気は、オ

ランダの古いファイアンス陶器の色で明るくなっていた。

廊下の突き当たりにはアフォンソの書斎があった。書斎は高僧の古い執務室のように赤いダマスク織で覆われていた。紫檀のばかでかいテーブル。浮彫が施されたオーク材の低い書棚。装丁本の厳かな豪華さ。すべてが研究者向きの禁欲的な落ち着きを漂わせている。ルーベンスの筆になる一幅の画がその落ち着きをいっそう引き立てていた。画は家宝の古い聖遺物で、心をかき乱す真っ赤な夕空を背にアスリートのような裸体が浮きあがったキリスト磔刑図である。カルロスは暖炉の脇に日本の金屏風を立てて祖父のためのコーナーを設け、そこに白熊の毛皮と立派な肘掛椅子を置いたが、椅子のタペストリーには、擦り切れた横糸にマイア家の家紋をかろうじて認めることができた。

家族の肖像が飾られた三階の廊下はアフォンソの部屋に通じていた。カルロスは寝室を家の角に陣取って独立した出入口を設け、庭の上に窓が来るようにした。三部屋続きの間（ま）にドアはなく、一枚の絨毯でつながっている。クッションのきいた椅子や壁を覆うシルクを見て、ヴィラサは思わず、こりゃ医者の寝所（しんじょ）じゃございません、踊り子の寝室です、と言った。

すでに学業を終えたカルロスだったが、ヨーロッパで長旅をしていたため、改修後もしばらく家に住む者はいなかった。アフォンソに、サンタ・オラーヴィアを引き払いラマリェーテに居を構える決心がようやくついたのは、カルロスが帰国する直前の、一八七五年のあの美しい秋のことであった。リスボンをふたたび眼にするのはじつに二十五年ぶりだったが、着いていく日もしないうちに、サンタ・オラーヴィアの木陰が恋しいとヴィラサに打ち明けたものだ。だが、いまさらそんなことを言っても仕方がない。孫と長いあいだ離れては暮らせないし、そもそもカルロスの商売繁盛を考えたら、リスボンに住まないわけにはゆかない…もっとも、寒い風土に適した奢侈に熱中していたカルロスが、タペストリーと重たい緞帳とビロードに金を浪費したにもかかわらず、アフォンソはラマリェーテが嫌いなわけではなかった。それにご近所も気に入っている。陽を浴びて眠るような郊外のこの静けさが心地よかったし、裏庭も好きだった。たしかにサンタ・オラーヴィアの庭園とは比ぶべくもなかったが、それでも、テラスへ上る階段の足下で向日葵がすくっと背を伸ばしているところも、イトスギとヒマラヤスギが寂しげな友人のように二本一緒に年老いているところも、キティラ島のヴィーナスが今や公園の彫像のように明るい色を放って、ヴェルサイユ宮殿とルイ十四世の世紀の舞台から抜け出してきたように見えるところも、なかなか好感がもてる。そして、水がふんだんに出るようになってからは、田園の断崖を模して岩石を三つ置いた壁龕の滝壺に小さな滝が注ぐ姿はじつに魅力的で、この家に棲む川の妖精ナーイアスの涙が大理石の水盤にぽたりぽたりと垂れるさまなど、陽のあたる裏庭の奥にメランコリックな雰囲気を与えているのだった。

アフォンソがまずがっかりしたのは、テラスからの眺めだった。以前ならきっと海まで一望できたにちがいない。ところがここ数年間で辺りに建てられた家が、この輝くばかりの水平線を遮ってしまっていた。今では、通りによって切り離された六階建ての建物二棟のあいだに海と山の細い帯がちらりと見えるだけで、ラマリェーテ前面の風景はこれがすべてだった。それでもアフォンソは、この風景にやがて気心の知れた魅力を感じるようになった。それはあたかも、マリンブルーの生地が白い石材の枠に収まってテラス前面の青空に吊るされ、さまざまな色と光のなかで、川の穏やかな一生に生じる泡沫（うたかた）の挿話を見せてくれるようであった。トラファリア[14]の帆船が船首を風上に向け軽々と走り抜けてゆくこともあれば、夕陽に染まった空の下、満帆の「ガレー船」が微風を受けながらゆっくりと入ってくることもある。また、憂鬱そうな大型定期船が、高波に備えて帆をすべて下したまま川を下ってゆく姿が見えたかと思うと、今にも荒れそうな海にたちまち呑み込まれて消えてゆくこと

もあった。そうかとおもえば、静かな午睡のひととき、幾日にもわたって、金色の砂のなかをイギリスの装甲艦がその黒い船体を見せていたこともある…そしてその背景にはいつも緑色濃い山の一部が、山頂のじっと動かぬ風車小屋が、汀（みぎわ）の趣深い白い家が二軒見えていた。家は、あるときは赤々と燃える光を窓がきらきらと照り返し、あるときは落日の柔らかなばら色に染まったもの思わしげな空に包まれたが、そのときの空の色は、まるで恥ずかしさに顔を赤らめている人のようであった。雨ともなると、家は寂しさに身を震わせ、荒天のもと、白々としたむきだしの孤独がひしひしと伝わってくるのだった。

テラスには、窓のある三つのドアで書斎から出入りができた。そしてアフォンソがまもなくしてひねもす過ごすようになったのが、高僧向きのこの美しい部屋である。心やさしい孫が用意してくれた部屋の隅の暖炉のそばで、祖父はひねもす過ごすようになった。孫がイギリスに長期滞在したときには、火のそばで甘美なひとときを過ごすことができた。サンタ・オラーヴィアでは四月まで暖炉に火をともし、その後は、家の祭壇ででもあるかのように、暖炉に一抱えの花を飾った。まだ他のどこよりもこの暖炉わきでこそ、瑞々しく心地よい香りに包まれ、いつものパイプとタキトゥスと大好きなラブレーを楽しめるのだ。

とはいえ、アフォンソはいわゆる引きこもり老人などではなかった。それどころか、年齢をものともせず、夏であれ冬であれ、夜が明けると起き上がって、冷たい水に浸かったあと――これがアフォンソにとっては朝のお祈りだった――すぐに裏庭へと出るのだった。水にたいしては迷信に近い愛情を抱いていて、人間にとって水の味、水の音、水の姿ほど良いものはないと常日ごろから口にしていた。サンタ・オラーヴィアでアフォンソがいちばん執着を感じていたのが、その生命に満ちた水である。湧水、噴水、鏡のように静謐な水たまり、散水の瑞々しいざわめき…そして水のこの強壮剤のような効能のおかげで、アフォンソは世紀が始まっていらい、こうして苦痛も病も知らず、家伝の健康法をきちんと守りながら、やっかいな出来事にも歳月にも耐えてやってこられたのだ。ただその歳月といえば、サンタ・オラーヴィアの樫の木を通り抜けてゆく歳月と大風のように、アフォンソにとって虚しい日々ではあったが。

アフォンソは背がやや低く、ずんぐりとしてたくましい、穏やかな性格の男だった。大きな顔から鷲鼻が突出し、皮膚の色はほとんど真っ赤。五部刈の白い頭と長く伸びて先の尖った白髭から、カルロスは、まるで英雄時代の精力的な男性だ、ドゥアルテ・デ・メネセス[14]やアフォンソ・デ・アウブケルケ[15]に似ている、と言っていたが、この言葉を聞くとアフォンソは孫に、おまえもこれがいかに見かけ倒しかは知っているだろう、と冗談まじりに言って微笑むのだった。

たしかにアフォンソはメネセスでもアウブケルケでもなく、愛読書と自分の肘掛椅子と炉辺でやるホイストが好きなお人好しの父祖にすぎなかった。自分はたんなる身勝手な男にすぎない。いつも自らそう広言していた。しかし、年老いたこのときほど、その寛大な精神が深く広かったことはなかった。収入の一部は指のあいだから、優しい施しへとさらさら零れ落ち、齢（よわい）を重ねるごとに貧しい者、弱い者への愛情がますます強くなっていた。サンタ・オラーヴィアの子どもたちはめったに怒らないやさしいおじいさんと思っていたのか、あちこちのドアからアフォンソめがけて駆け込んでくる始末だった。アフォンソは生きとし生けるものすべてが愛おしくてたまらなかった。歩きながら蟻の行列を踏むことのできない人間、枯れた花に憐れみを覚える人間のひとりだった。

ビロードの擦り切れたジャケットを羽織って炉辺にやってきて、穏やかに微笑みながら本を片手にし、年老いた猫を足元に置くアフォンソの姿は族長に似ていると、ヴィラサはいつも評していた。いまとなっては〈立派なセントバーナード犬〈トビアス〉が死ん

でしまったので）、白地に金色のメッシュが入った重く巨大なアンゴラ種の猫がアフォンソの忠実な仲間であった。サンタ・オラーヴィアで生まれ、「ボニファシオ」という名前を付けられた猫は、愛と狩りの年齢に達すると「ドン・ボニファシオ・デ・カダトラーヴァ」というより気高い名前をもらったが、今や寝てばかりでぶよぶよに太り、ついに立派な司教職について、「ボニファシオ司祭さま」になっていた…

こうした生活も、夏の美しい川のようにいつも明るくゆったり静かに流れてきたわけではない。今では庭の薔薇を前にして眼に穏やかな光を宿し、火のそばでお気に入りのギゾーを読み返すこの父祖も、その父親の意見によれば、かつてポルトガル一獰猛なジャコバン派だったのである！　もっとも、貧しい青年の革命熱も、ルソー、ヴォルネー、エルヴェシウス、百科全書を読み、憲法のために鉄砲を撃ち、自由主義者の帽子をかぶって目の覚めるような青いネクタイを締め、フリーメーソンの集会所で至高の造物主にたいしてあわや憎しみの頌歌を放歌高吟しようか、という程度にとどまっていた。それでも父親を激怒させるにはじゅうぶんであった。カエターノ・ダ・マイアは、ロベスピエールの名前が出るたびに十字を切るような古いタイプの誇り高いポルトガル人で、信心に凝り固まったひ弱な貴族特有の冷淡さを装っていたが、はらわたは激しい感情で煮えくり返っていた。ジャコバン派にたいする恐怖と憎悪である。植民地の喪失という祖国の不幸から、痛風の発作という個人的な不幸まで、この世のありとあらゆる不幸をすべてジャコバン派のせいにしていた。ジャコバン派を国から根こそぎにするため、強力な救世主にして天佑の復興者ドン・ミゲル王子に期待を寄せていた…ところが、こともあろうにその自分の息子がジャコバン派なのだ。ヨブ並みの試練ではないか！

最初のうちこそ、この若造もいずれは悔い改めるだろうと考え、厳しい顔で嫌味たらしく「市民（シダダウン）！」と呼びかける程度にとどめていた。ところが、世継たる息子が、ある晩、市民の提灯行列祭りで群衆に紛れ、神聖同盟から派遣されたオーストリア外交官の家の、灯の消えた窓ガラスに投石したことがわかったときには、この若造はまぎれもなくマラーだと、堪忍袋の緒を切り、怒りを爆発させた。ひどい痛風で肘掛椅子に釘づけになっていたため、ポルトガルの正しい父親として、インドの杖で息子をめった打ちにすることができなかったが、小遣いもやらず餞（はなむけ）の言葉もかけずに家から追い出そうとした。私生児のように捨ててやる。あのフリーメーソンにおれの血が流れているはずなどない！　と。

母親の涙と、とりわけ、ベンフィーカに同居していた義姉の説得に、カエターノは態度を軟化させた。このアイルランド人の義姉は、高い教養をもち、ミネルヴァのように尊敬されていたが、後見人になって若者に英語を教え、赤ん坊のようにかわいがっていた。カエターノ・ダ・マイアは息子をサンタ・オラーヴィアの農園付き別荘（キンタ）に追放するだけにとどめたが、神父がベンフィーカの家にやってくるたびにいつでもその懐に身を投げ出しては家の不幸を託ち、涙に暮れた。すると神父たちはこう断言したものだ。神さま、オウリークの古い神さまが、マイア家の一員に悪鬼の長（ベルゼブル）や革命と契約を結せることなどけっしてお許しにならないでしょう！　たとえ父なる神がいらっしゃらなくとも、家の守護神であり、子どもの代母である孤独の聖母マリアさまがいらっしゃいます。きっと奇跡を起こしてくださるでしょう。

そして奇跡はほんとうに起こった。その数か月後、あのジャコバン党員が、あのマラーが、後悔もさることながらとりわけ孤独にうんざりして、サンタ・オラーヴィアから戻ってきたのである。クーニャ家の従姉妹たちが数珠（ロザリオ）を繰って唱える祈りよりも、セーナ旅団長とのお茶の方がさらに退屈だったのだろう。帰ってくるなり息子は父親に祝福と数千クルサードを求めた。ファニーおばさんがあん

なに懐かしがっている、牧場の緑鮮やかにして金髪輝くあの国、イギリスへ行きたいというのである。父親は滂沱の涙で息子に接吻を与え、熱に浮かされたようにすべてを受け入れた。間違いない。孤独の聖母マリアさまが願いを聞き入れてくださったのだ！　聴罪司祭のジェローニモ・ダ・コンセイサウンご自身もこれはまぎれもなく奇跡だとおっしゃっているではないか。カルナシデの奇跡[16]にも劣らぬ奇蹟だと。

　アフォンソは旅立った。季節は春。イギリスは一面緑に燃えていた。その贅沢な公園、たっぷりとした安楽、高尚な習慣の心に染み入るハーモニー、あの謹厳で屈強な民族。すべてがアフォンソを魅了した。修道会の陰鬱な神父にたいして抱いていた憎しみのことも、ミラボーを朗読しながら何時間も過ごしたカフェ・ドス・レモラーレスのことも、古典的でヴォルテール的な共和国を打ち立てよう、スキピオ流の三頭政治で至高存在を寿ぐのだ、そう考えていたこともたちまち忘れた。ポルトガルで四月政変（アブリアーダ）[17]が起こっていたちょうどそのとき、アフォンソはエプソン競馬場にいた。二輪馬車に乗って、偽の高い鼻をつけ、すさまじい雄たけびを上げていたのである。そのときにもアルト地区の裏通りでは、フリーメーソンの仲間たちが、アルテル産の逞しい馬に乗ったドン・ミゲル王子から追い立てられていたことなどつゆ知らなかった。

　父親が急逝したので、アフォンソはリスボンに戻らざるを得なくなった。そのころ、ルナ伯爵の娘、ドナ・マリア・エドゥワルダ・ルナと知り合った。小麦色の肌をした繊細でやや虚弱な美人だった。喪が明けるとアフォンソは娘と結婚した。息子をひとりもうけたが、さらに子供が欲しかった。そこで、さながら若い族長のようにあれこれと考えをめぐらし、ベンフィーカの大邸宅を改修して周囲に木立を植え、老後に魅力を与えてくれる愛しい孫子のために屋根と日陰を用意した。

　しかしアフォンソはイギリスが忘れられなかった。ミゲルが支配するこのリスボンにいるとますますその思いは強くなる。リスボンはまるで野蛮人が支配するチュニジアのようだった。修道士も御者も教会の愚かな陰謀に加担して大衆食堂と礼拝堂をひとしく震えあがらせ、無礼で残忍で頑迷固陋な大衆は、聖体顕示台から闘牛場の牛舎へと転げ落ち、アフォンソの眼には堕落と盲信の塊としか見えない王子を騒々しいほどの熱気で渇望しているのだ…

　この馬鹿げたショーにアフォンソ・ダ・マイアは腹を立てていた。そして静かな夜のひととき、友人たちに囲まれ、まだ小さな息子を膝に乗せて、心の底にわだかまる怒りを率直に見せることも多かった。たしかに若いときのようにカトー[18]とムキウス・スカエウォラ[19]のリスボンを要求していたわけではない。己の歴史的な特権を手放そうとしない貴族の努力さえ認めていた。しかし、アフォンソが望んでいたのは知的で威厳のある貴族だった。「トーリー党」の貴族たちのようにすべてにおいて精神的な指導力を発揮し（ひいきの引き倒しで、アフォンソはイギリスを理想化し過ぎていた）、品行を涵養し、文学に息吹を与え、快活に生き、趣味よく語り、高い理想を示し、品格ある行動の鏡となる、そんな貴族である。我慢がならなかったのは粗野で卑しいケルーズ[20]の世界であった。

　こうした言葉は口にされるやたちまちケルーズまで届いてしまうものだ。果たせるかな、全国議会（コルテス・ジェライス）[21]が開かれると、警察がやってきて「隠された文書と武器を探すため」ベンフィーカに踏み込んだ。

　アフォンソ・ダ・マイアは、息子を腕に抱き、震える妻を脇に置いて、従容としてひと言も発さず、家宅捜索に立ち会った。抽斗（ひきだし）は銃床で破壊され、執行吏の汚い手がベッドのマットレスを探りまわった。治安判事は結局なにも見つけられなかった。ワインさえ一杯ごちそうになって、管理人に「なにせ時代がえらく厳しいものですから」と打ち明けた。この日の午前中から邸宅の窓はすべて閉じられたままになった。立派な表門もこのさきいちどとして開かず、女主人の馬車も外出できなかった。数週間後、アフォンソは妻と息

子とともにイギリスに発った。亡命である。

アフォンソは、ロンドン近郊の町リッチモンドのすぐ近くに長期滞在し、贅沢な暮らし送った。住まいは、サリー州の心地よい穏やかな風景に囲まれた公園の奥にあった。

かつては王妃ドナ・カルロタ・ジョアキーナ[22]に可愛がられ、今ではドン・ミゲルの無愛想な相談役となっているルナ伯爵の影響力で、アフォンソの資産は没収されずにすんだ。そのためにアフォンソ・ダ・マイアは豪勢な生活ができたのである。

最初のうちこそパルメラとベルファスト号の人々[23]に気をもんだり悩まされたりもした。しかし曲がったことの嫌いなアフォンソは、まもなくして、ここイギリスでは、同じ理想に奉じて敗れた人々のあいだにさえカーストや階層格差が残っていることに気づき、反発を覚えるようになった。貴族や司法官たちはロンドンで左うちわの暮らしを送っているというのに、庶民と兵士は、ガリシアの苦難のあと、プリマスのバラックで飢えと蛆虫と高熱で死にそうな思いをしているのだ。ほどなくして自由主義者の領袖と衝突した。アフォンソ、おまえは二十年の革命家[24]だ、過激な民衆扇動主義者だ。そんな非難を受け、ついには自由主義が信じられなくなった。かくしてアフォンソは孤立した。もっとも、財布の口を緩めっぱなしだったため、大枚の義捐金がこぼれ落ちていたが…しかし最初の遠征軍が派遣され、それまで溜まっていた亡命者の数も少しずつ減り始めるころになると、アフォンソ自身の言葉を借りて言えば、イギリスの空気をはじめて心ゆくまで味わえるようになった。

数か月後、ベンフィーカにいた母親が脳卒中で逝き、おばのファニーがリッチモンドにやってきて、その濁りのない理性、白い巻き毛、慎ましいミネルヴァのような態度でアフォンソの幸せを完璧なものにしてくれた。それは夢に見た生活だった。イギリス式の風格ある住まいは樹齢数百年という木々に囲まれ、あたりには広大な芝生が広がり、芝生では立派な牛が眠ったり草を食んだりしている。すべては健康で力強く、自由かつ堅牢で、アフォンソが心から愛する世界がそこにあった。

人間関係が広がった。格調高く内容豊かなイギリス文学を勉強した。イギリスの貴族のように農耕、馬の飼育、慈善活動にも関心をもった。この平和と秩序のなかにいつまでもとどまろうと考えては喜びに浸っていた。

ただ、アフォンソは妻が幸せでないことを肌で感じていた。妻は寂しげな面持ちでもの思いに沈み、家のどこにいてもいつも咳をしていた。夜になると暖炉のそばに腰を掛けてため息をつき、じっと黙り込んでいる…

かわいそうに！　祖国や親戚や教会への郷愁に心をむしばまれていたのだ。小麦色の肌をした小柄な正真正銘のリスボン子は、不平不満をもらすでもなく、弱弱しく微笑みながら、イギリスに到着してこのかた、異端の土地と野蛮な言葉に密かな憎しみを抱きながら暮らしてきたのである。いつもがたがたと震えては服を着こみ、怯えた眼差しで灰色の空や木々につもる雪を眺めてきた。心はいつもここになく、遠くリスボンの教会の内陣や太陽に照りつけられた街区へと舞い戻ってゆく。相も変らぬその信心（ルナ家の人々の信心深さときたら！）は、「教皇至上主義者」にたいする周囲の敵愾心を感じれば感じるほどいやがうえにも燃え上った。そして、心が満たされるのはただ、夜、ポルトガル人の召使たちとともに屋根裏部屋に逃げ込み、莫蓙にうずくまってロザリオの祈りをささげ、プロテスタントの国のただなかでこうしてアヴェマリアを唱えながらカトリック教徒同士密かに共謀する魅力を味わうときだけだった。

イギリスのすべてが嫌いで、息子ペドリーニョ[25]がリッチモンドの学校に通うことも認めず、そこはカトリック系の学校だというアフォンソの説得も聞き入れようとしなかった。聖地巡礼もしない、聖ジョアンにたいする熱烈な信仰もない、受難のキリスト像もなければ通りで修道士も見かけないカトリックなんて願い下げだわ。そ

んなもの宗教じゃない。異端の輩に、わが子ペドリーニョの魂を預けることなんかできるものですか。そう考え、息子の教育のためにと、ルナ侯爵の礼拝堂付き司祭ヴァスケス神父をリスボンから呼び寄せた。

ヴァスケス神父はペドロにラテン語の語形変化と、とりわけ公教要理（カテキズム）を教えた。狩りや活気あふれる自由なロンドンの街角から帰ってきて、勉強部屋から神父の眠そうな声が聞こえてくると、アフォンソ・ダ・マイアは悲しくなるのだった。闇の奥から響くような声が尋ねる。

「魂の敵はいくつある？」

すると子どもはもっと眠そうな声でもぐもぐ答える。

「この世と悪魔と肉体の三つです…」

かわいそうなペドリーニョ！　おまえの魂の敵はむしろヴァスケス神父だ。嗅ぎタバコ用のハンカチを膝のうえに広げ、肘掛け椅子に深々と腰掛けておくびをする、太って不潔なヴァスケス神父なんだよ。

ときには怒りに駆られたアフォンソが部屋のなかに入ってきて公教要理（カテキズム）を中断させると、ペドリーニョの手をつかんで連れ出し、テムズ川のほとりで木の下で走り回らせることもあった。川面の燦燦たる照り返しのなかで、公教要理（カテキズム）が心に載せた重荷から解放してやろうというのである。しかしそうすると決まってびっくりした母親が家から飛び出してきて、大きなコートで息子を包んでしまうのであった。召使の膝の中と目張りをした部屋の心地よさにひとたび慣れてしまうと、子どもは、外で風や木を怖がるようになり、父子は少しずつ沈んだ気持ちで枯葉を踏むようになった。息子は生命力溢れる木立の影におびえ、父親は息子のひ弱さに肩を落としてもの悲しい気持ちに耽りながら…

しかし、息子を軟弱にする母親の手とヴァスケス神父の堪えがたい公教要理（カテキズム）から若い子を引き離そうというそぶりを少しでもみせると、繊細な母親はたちまち熱を出してしまう。アフォンソは、それ以上哀れな病人の意に反することができなかった。こんなに自分を愛してくれる高潔な妻なのに…そこで次第にファニーおばさんに愚痴をこぼすようになった。この賢明なアイルランド女性は、読んでいる本――アディソンの学術論文やポープの詩だったりしたが――のあいだに眼鏡を挟むと、悲しげな表情で肩をすくめてみせるのだった。このあたしにどうしろっていうの…？

マリア・エドゥワルダの咳は、悲哀を帯びたその言葉と同じように募ってゆき、ついに「最後の希望」を口にするようになった。もういちど祖国の土地を踏みたというのである。今度は親王ドン・ミゲルの方が国外に追放されて、国内に大いなる平和が訪れたのだから、古巣のベンフィーカに戻ってわるい理由（わけ）があろうか。しかしアフォンソは頑として譲らなかった。また銃床で抽斗を割られるなんぞごめんだ。それに、ドン・ペドロの兵士がドン・ミゲルの執行吏以上に身の安全を保証してくれるわけではない。

そうこうしているうちに家の不幸に追い打ちがかけられた。ファニーおばさんが五月の寒空に肺炎を起こして亡くなったのである。このことがマリア・エドゥワルダの憂鬱に拍車をかけた。マリアはファニーをとても愛していた。もっとも、アイルランド人でカトリックだという理由ではあったが。

気を晴らしてもらうため、アフォンソはマリアをイタリアに連れて行った。ローマ近郊の心地よいヴィラである。陽の光があふれていた。太陽は毎日きちんきちんと顔を出してはテラスに陽光を惜しみなく注ぎ、月桂樹とムルタを黄金に染め上げている。そしてあの遠くに見える大理石のなかには、尊く神聖なお方――教皇さまがいらっしゃるのだ！

だが、悲しみに暮れる奥方は相変わらずめそめそ泣きつづけていた。心の底から受け入れられるのはリスボンとそこで行われる九日間祈禱、自らの地区の守護聖人へ真摯な祈り、午後の太陽と濛々た

る埃を浴びてざわめきのなか贖罪のためにのろのろと進む神輿行列だけだったのだ。

妻をなだめるためにはベンフィーカに戻らざるを得なかった。

ベンフィーカで始まった暮らしは絶望的だった。マリア・エドゥワルダは徐々にやつれ、日に日に蒼白くなっていった。何週間もソファにじっと腰かけたまま、イギリスから持ってきた大きな毛皮の上で、透き通るように白い指を組んでいる。ヴァスケス神父は不安におののくこの魂を意のままに操っていた。夫人にとって神とは酷い支配者であったが、それが今や家の主人にまでなっていたのである。しかも、聖職者用の外套を羽織り、小帽子をかぶった、ヴァスケス神父以外の教会関係者も、アフォンソは廊下でしじゅう目撃していた。どうやら古くからいるフランシスコ会修道士か、地区に寄生する痩せたカプチン会修道士のようだった。家のなかは聖具室のようにかび臭かった。そしてマリアの部屋からは、いつも連禱の悲痛な声がもやもやと聞こえていた。

この聖職者たちはみな食器貯蔵室で食事をし、ポルトワインを飲んでいた。夫人が聖職者に許していた月々の費用の支払いで、管理人には過剰な負担がかかっていた。パトリーシオとかいう修道士など、国王ドン・ジョゼ一世[26]の御心の平安のために二百回ミサをあげると称しては一クルザードを詐取していたのである。

妻を囲繞する偏狭な信心への反発から、アフォンソは恨み深い無神論者になっていった。教会も修道院のように閉鎖してしまえばよい[27]。聖画像は斧でずたずたに切り裂き、神父を皆殺しにしてしまいたい…そう思った。家から祈禱の声が聞こえてくるとたちまち逃げ出し、別荘（クインタ）の奥に行って、蔦の絡まる見晴台の下でヴォルテールを読むか、古くからの友人で、ケルーズの農園付き別荘（キンタ）に暮らすセケイラ陸軍大佐のところに出かけて行って、鬱屈した気持ちをぶちまけるのだった。

そうこうするうちに、ペドリーニョは大人になろうとしていた。上背が伸びず、マリア・エドゥアルダのように小柄で神経質な男で、マイア家の血筋の逞しさがなかった。燃え立つような小麦色の肌をした卵型の繊細な顔立ち、いつでもたちまち濡れそうな逆らい難い魅力を放つ眼、それらがペドリーニョを美しいアラブ人のように見せていた。ペドロは、おもちゃにも、動物にも、花にも、本にも興味を示さぬまま緩慢に成長していた。その半ば眠り込んだ受動的な魂のうちでは、激しい欲望が打ち震えることなど絶えてなかったらしい。ただ、ときどきイタリアにはどうしても帰りたいと洩らすことがあった。ヴァスケス神父に嫌気を示すこともあったが、あえて反抗するまでには至らなかった。すべてにおいてひ弱だったのである。そして、こうした慢性的な意気消沈がときおりひどい鬱に転じることがあって、そうなるとペドリーニョは幾日も幾日も蒼白い顔をして無気力に黙り込んだまま眼は落ちくぼみ、早くも老人のような佇まいを見せた。それまでに露わにしたたったひとつの生き生きとした感情といえば、母親にたいする情熱だけであった。

アフォンソは息子をコインブラに遣りたかった。しかし、ペドロと別れなければならないと考えただけで、哀れな母親はアフォンソのまえに跪き、どもり、そして震えた。お願いだからと手を差し出され、蠟のように白い顔から滂沱の涙を流されては、アフォンソとしても退かざるを得ない。若僧はそのままベンフィーカにとどまり、お仕着せを着た下男を引き連れて馬をゆっくり乗りまわし、ジンをひっかけにリスボンの居酒屋にしけこむ習慣に早くも染まった…やがて次第に惚れっぽい性質（たち）が現れるようになり、十九歳で私生児の父親になった。

甘やかされてはいても、息子は若者の良さをすっかり失っているわけではないことがわかり、アフォンソ・ダ・マイアはほっとした。あいつは利発で健康だ。それに、マイア家の人間の例（ためし）にもれず、なかなか肝が据わっている。しばらくまえには、「パルミット」という長い木の棒を持った近くの農民三人を、鞭一本で追い散

らしたことがあったではないか。

信心のすさまじい断末魔のなかで、地獄を恐れながら数日間七転八倒したすえに母親が亡くなったとき、ペドロの苦しみようときたらまともではなかった。もし母親が断末魔の苦しみから逃れられるものなら、一年間、中庭の敷石の上で寝るとまで誓ったのである。そしてお棺が運び出され、神父たちが立ち去ると、鈍く、物憂く、涙の涸れ果てた苦しみのなかへと沈み込んだまま這い上がろうともせず、ベッドにうつ伏せになったままいつまでも贖罪の念に耽っていた。ペドロは何か月もそこはかとない悲しみに捉えられていた。そしてアフォンソ・ダ・マイアは、自らの息子にして跡取りであるこの若者が、毎日、正喪服を着て外出し、母親の眠る墓地まで行く姿を見て、早くも失望を覚えるのだった…

この大げさで病的な苦しみもついに終わった。続いてすぐに始まったのは騒々しく自堕落な放蕩暮らしの時期だった。ペドロは淫らなロマン主義に足許を掬われ、母親への郷愁を、売春宿と居酒屋に沈めようとした。だが、生まれつき精神のアンバランスなペドロが、あれほどすぐに、あれほど騒々しく晴らそうとした不安の横溢もまた、憑き物が落ちたようにすっと消え去った。

カフェ・マラーレ[28]で派手に騒ぎ、闘牛場へ向かう牡牛に街中で挑みかかっては武勇伝をつくり、潰れるまで馬を乗りまわし、サン・カルロス劇場[29]の役者たちにブーイングの嵐を浴びせかけた一年が終わると、古いふさぎの虫がふたたび頭をもたげ、砂漠のようにいつ果てるともしれぬ寡黙な日々が戻ってきた。そうなると家に引きこもったままあちらこちらの部屋を回っては欠伸をしたり、苦しみの淵に沈んだように庭の木の下で腹這いになったりした。この時期は信心深くもなった。聖者伝を読み、ひっきりなしに教会へでかけた。弱者を修道院へと導く、魂のあの突然の落ち込みに襲われていたのである。

こうしたことがアフォンソ・ダ・マイアを苦しめた。ミサ典書を小脇に抱えベンフィーカの教会へ通う老人くさい息子の姿を見るくらいなら、へろへろに酔って明け方にリスボンの街から戻ってくる姿を見る方がまだましだと思った。

そしてついに、意に反して強迫観念に襲われるようになった。ベンフィーカには妻の祖父の肖像画があったが、ペドロがこの祖父、つまりルナ家の祖父にそっくりだという思いから逃れられなくなったのである。祖父については、子どもたちの恐怖心を煽るために家でよく話題にしていたが、この男、じつは気が狂っていて、自分をユダだと信じ込み、無花果（いちじく）の樹に首をくくって死んだのだった…

しかしある日、精神の過剰も危機も終わりを迎えた。ペドロ・ダ・マイアが恋をしたのである！　それはロメオ風の恋だった。運命の目眩めく眼差しの交換に始まる恋。急襲しては嵐のように人生を破壊し、理性も人間的な尊敬の念も思うがままに引き抜いて、めちゃくちゃに深淵へと投げ込む、そうした類の恋だった。

ある日の午後、ペドロがカフェ・マラーレにいると、向かいのマダム・ルヴァイヤンの店[30]のドアのまえに青い四輪馬車（カレーシュ）が止まるのが眼に入った。乗っていたのは白い帽子を被った老人と、カシミアのショールを羽織ったブロンドの女だった。

身の丈低くがっちりとした体躯で、短く刈り込んだ顎鬚には白髪が交じり、昔船乗りでもしていたように黒光りした顔のその老人は、リューマチを患っているようなぎこちない身ごなしで召使いに支えられ、足をひきずりながら店のドアを入って行ったが、女の方はそのとき振り返ってカフェ・マラーレをちらりと見た。

薔薇があしらわれた黒い帽子の下から黄褐色がかった金髪が流れて端正な狭い額のうえで軽くうねり、魅力的な眼は周囲のあらゆるものを照らしていた。冷気が大理石のような肌をいっそう蒼白くしていたが、彫像のように厳かな横顔と、ショールに包まれた肩から腕の高貴な肉付きを眼にしたその瞬間、ペドロはこの世のものとも思えぬなにか不滅の存在でも見ているように感じられた。

ペドロはその女を知らなかった。しかし、窓の反対側の側柱で退屈そうに煙草をふかしている痩せた背の高い黒髭の若者が、ペドロのむさぼるような関心に気づき、シアード通り[31]を速歩で上ってゆく四輪馬車（カレーシュ）をどぎまぎしながら燃えるような眼差しで追っていたことを見て取ると、やってきてペドロの腕を取り、顔を寄せて野太い声でゆっくりとこうつぶやいた。

「おい、ペドロ、名前を知りたいか？　名前と出自とあらましを。知りたけりゃこのアレンカールにおごれ。喉がからからのアレンカールにシャンペン一本。どうだ？」

ペドロはシャンペンを注文した。するとアレンカールはほっそりとした指を巻毛と髭に通したあと、椅子にもたれかかって袖口をぐいと引っ張り、こう始めた。

「黄金の秋の日の夕暮れに…」

「アンドレ」ペドロは大理石のテーブルを叩きながらウェイターを大声で呼んだ。「シャンペンを片付けてくれ！」

アレンカールはエピファーニオという役者をまねて叫んだ。

「これは異なことを！　わが唇の、渇きいまだ癒されぬままに？…」

結局シャンペンは残った。しかし、ペドロの友人アレンカールは『暁の声』の詩人であることを忘れ、青い四輪馬車（カレーシュ）の人物たちについてキリスト教徒の実用的な言葉で説明した。

「さてとペドロくん。本題だ！」

それは二年前で、ちょうどペドロが母親を亡くしたころのことだ。その老人、つまり父親のモンフォルトは、例の四輪馬車（カレーシュ）に乗って美しい娘を脇にしたがえ、リスボンの街と社交界にある朝突然[32]やってきた。ふたりの氏素性を知る者はいない。アロイオスでヴァルガス邸の一階を借り、娘はサウン・カルロス歌劇場に顔を見せるようになったが、それが周囲に強い印象を与えていて、おれなんか、動脈瘤ができそうだったよ。娘が劇場のフォワイエを横切るときには、神の被造物が放つ眼も眩むほどのオーロラにふれてだれもが肩を丸める。女神のような歩みを進めると、そのうしろには宮廷用ドレスの長い裾がひきずられる。そのドレスは祝典の正装のようにいつもデコルテで、独身であるにもかかわらず宝石がきらめいるんだ。父親はけっして娘の腕を取らず、執事用の大きな白ネクタイで首を締めつけて後ろからついて行くんだが、娘の放つブロンドの光に包まれると、その顔はいっそう黒く、いっそう船乗りのように見えたな。オペラグラス、オペラの台本、ドロップの入った袋、扇子、自分用の傘を手にもった父親はおずおずとしていて、ほとんどおびえているようだった。しかし、娘が、さながらティツィアーノのモデルのようなルネサンス芸術の理想のまぎれもない化身として姿を現すのは、特別席に入り、その象牙のような首から肩にかけての部分と三つ編みにしたブロンドの髪に光があたるそのときだ…娘の姿を初めて眼にした夜、おれは座席の定期予約をしている小麦色の肌の女たちに娘を指し示しながらこう言ったよ。

「ほらごらん！　ドン・ジョアン六世時代の古い銅貨にはさまれたあの新品のドゥカード金貨を」

例の薄汚い女たらし、マガリャンイスがこの言葉を『ポルトガル人』紙の文芸欄に書いていたけど、この言葉の作者はだれあろう、このおれ、アレンカールだ！

若い男たちはとうぜん、まもなくしてアロイオスの邸宅のまわりをうろつくようになった。しかし邸宅の窓が開くことは一度たりともなかった。質問された召使いたちが繰り返すのは、娘さんの名前はマリアで、ご主人さまの名前はマヌエルです、という返事ばかり。六ピント[33]の賄賂を握らされて、やっとひとりの女中がそれ以上の話をした。男は口数が少なく、娘を前にすると怖くて震え、ハンモックに寝ているが、いっぽうの娘ときたらダークブルーのシルクの巣に暮らしていて、一日中小説を読んで過ごしているというんだ。だが、これだけの情報では貪欲なリスボンを満足させることなどできない。定期的に地道で巧妙な調査がなされた…おれもその調

査に加わってたってわけよ。
　その結果、ぞっとするようなことが判明した。父親のモンフォルトはアソーレスの出身だった。まだほんの若いころ喧嘩で刃傷沙汰になり、気づいたときには道端に死体が転がっていて、やむなくアメリカのブリッグ船に飛び乗り、島から逃げ出した。時が経ち、モンフォルトはタヴェイラ家の代理人であるシルヴァとかいう男と出くわした。シルヴァはすでにアソーレスでモンフォルトと知り合いだったが、島にタバコを植えたいと考えていたタヴェイラ家のために栽培技術をハバナで勉強していて、このときそのハバナでモンフォルト（本名はフォルトだった）に出くわした。モンフォルトがニュー・オーリンズ行きの船を捜して埠頭を藁底のサンダルでうろうろ歩き回っていたときのことらしい。
　モンフォルトの履歴はここでいったん闇に消える。どうも農場管理人としてヴァージニア州のプランテーションでしばらく働いていたらしい…ふたたび表舞台に登場したとき、モンフォルトはブリッグ船ノヴァ・リンダ号の船長として活躍し、ブラジル、ハバナ、ニュー・オーリンズに黒人奴隷を運んでいた。
　イギリスの巡洋艦から逃げ出すと、今度はアフリカの毛皮製品でひと山あて、いまではああして財産と土地を持つご立派な紳士よ。サウン・カルロス歌劇場にコレッリの音楽を聞きに通うご身分というわけさ。とは言っても、いまおれが話したぞっとするような経歴には、はっきりしないところが多いし、風聞の域も出ない。筋が通っているようにも思えないし…
「で、娘は？」まじめな蒼白い顔で聞いていたペドロが尋ねた。
　だがアレンカールも娘のことは知らなかった。あんな美しい金髪娘をとこで手に入れたのか？　母親はだれで、いまどこにいるのか？　カシミアのショールを羽織ったあんなに堂々としたふるまいは、いったいだれの手ほどきによるものなのか？…
「それはさ、ペドロ、

抜け目なきリスボンの
けっして明かさぬ謎
神のみぞ知る謎

だよ」
　いずれにせよ、リスボンが血と黒人のこの伝説を発見してから、熱狂的なモンフォルト熱はぱたりと途絶えた。なんてこった！　女神ユーノーが殺人者の血を引き、ティツィアーノの『美女（ベルタ）』が黒人奴隷商の娘だぞ！　宝石をちりばめたあれほどの金髪美女だから、こき下ろすのが楽しくて仕方ないんだろうな。女たちは、やがて娘を「女黒んぼ商」と呼ぶようになったよ。ドナ・マリア・ダ・ガマなんて、今じゃ娘が劇場に現れると、扇子のかげに顔を隠すふりをするほどだ。パパがナイフで突き刺したときに噴き出した血が（とくに美しいルビーを身に着けているときなんか）娘の姿に垣間見えるようだっていうんだから！　娘はさんざんみんなに叩かれた。それで、リスボンでの最初の冬が終わると、モンフォルト父娘は姿を見せなくなった。あいつらは落ちぶれたんだとか、警察が老人の行方を追っているんだとか、相変わらず悪事を重ねているだとか、狂おしいほどにあれこれと語られた。でも、ご立派なモンフォルトは、関節リュウマチを患っていて、ピレネーで静かに水浴びしていたに過ぎなかったんだよ。豪勢なこった…メロがふたりと知り合ったのが、そのピレネーだ…
「ああ！　メロはふたりと知り合いなのか？」ペドロは叫んだ。
「そうだ。メロはふたりと知り合いだ」
　ペドロはしばらくしてマラーレを去ったが、その晩、帰宅するまえにヴァルガス邸に行き、粉糠雨にもかかわらず、灯が消え、森閑とした屋敷のまわりを想像力に火をつけたまま一時間もうろついた。二週間後、アレンカールは『セビリアの理髪師』の第一幕が終わったころサウン・カルロス歌劇場に入ってびっくりした。ペド

ロ・ダ・マイアが、モンフォルト家貸し切りの一階ボックス席の最前列に陣取り、隣にはマリアが座っていたからである。ペドロは燕尾服に緋色の椿を挿していた。ビロードで覆われた手すりに挿した一輪挿しの椿と同じ色だった。

このときほどマリアが美しく見えたことはなかった。全リスボンの顰蹙を買うような例の芝居がかった大げさな〈おしゃれ〉に、女たちは「女優気取り」だと言った。小麦色をした絹のドレスに身を包み、三つ編みの髪には黄色の薔薇と小麦の穂が挿してある。胸元と腕を飾るのはオパール。そして、太陽にじりじりと照らされて頭を垂れる実りきった麦畑のような色調が、髪の金色と溶け合って象牙色の肌を照らし、彫像のような体のまわりに豊かに広がっていて、マリアに豊穣の女神ケレスのような輝きを与えていた。ボックス席の奥には、父モンフォルテと立ち話をしているメロの豊かな金色の髭が垣間見える。メロはいつものようにボックス席の隅の暗がりに隠れていた。

アレンカールはガマ家のボックス席まで行って、そこからこの「事件」を観察した。ペドロは自分の席に戻り、腕組みをしてマリアを見つめていた。マリアはしばらく女神の泰然自若とした態度をとっていたが、その後、ロジーナとリンドーロの二重唱になると、その深く青い眼を二度ほどじっとペドロに注いだ。その眼差しは本物で、その時間は長かった。アレンカールは腕を振り回してカフェ・マラーレに走り、ニュースを大声でわめきちらした。

「女黒んぼ商」にたいするペドロ・ダ・マイアの情熱はまもなくしてリスボンじゅうの話題になった。しかもペドロは、人目もはばからず通りの角のヴァルガス邸の前に蒼白い恍惚の表情で突っ立って、屋敷の窓をじっと見つめるという古典的な恋のアプローチに及んだ。

ペドロは六枚に及ぶ手紙を二日と空けずに書いた。カフェ・マラーレに出かけて行っては支離滅裂な詩を書いていたのである。眼の前に置かれたジン・トレイに積み上げられた紙にはあちこち絡まりあった線がごちゃごちゃに引かれていたが、その紙がだれに宛てたものだか、カフェで知らぬ者はなかった。友人がカフェの入口でペドロ・ダ・マイアはいるか尋ねると、給仕人はごくあたりまえのことのように、

「ペドロさんでいらっしゃいますね？　あそこで若いお嬢さんに手紙を書いておいでです」

と答える。

ペドロ自身、友人が近づいて来れば手を伸ばして握手をし、明るい態度で屈託のない魅力的な笑顔をふりまき、大声でこう言うのだった。

「悪いがちょっとそこで待っててくれ。もう少しでマリアへの手紙を書き終えるから」

ベンフィーカからホイストをやりに出て来たアフォンソ・ダ・マイアの古い友人たち、とりわけ家の品位に強くこだわるマイア家の管理人ヴィラサは、まもなくペドリーニョの恋の消息をアフォンソに知らせてくれるようなった。アフォンソにはすでに予想がついていた。裏庭の面倒を見てくれる下僕が庭でいちばん良い枝ぶりの椿を毎日持って出て行くところを眼にしていたし、毎朝早く廊下で、金色の封蠟をして印象を捺した封筒から芳香を漂わせながら若者の部屋に向う召使いの姿を目撃していたからである。アフォンソには悪い気がしなかった。なんであれ人間的な強い感情が、無分別な放縦や賭博やわけのわからぬ鬱状態から息子を救い、あの暗く怠惰な日々に再び陥らないようにしてくれているのだ。

しかしアフォンソはその娘の名前を知らないばかりか、モンフォルトの存在すら知らなかった。そして、アソーレスで起こした刃傷沙汰のこと、ヴァージニア州の農園（キンタ）で農場管理人として鞭をふるっていたこと、ブリッグ船ノヴァ・リンダ号のこと、老人の不吉な伝説のことなど、友人たちが明かしてくれる詳細を知るようになる

と、アフォンソ・ダ・マイアはうんざりした。

ある晩、セケイラ大佐が、マリア・モンフォルトとペドロが馬で散歩をしていて、「ふたりともとっても上手で、とっても上品」だったとホイストのテーブルで語ると、アフォンソはしばらく黙ったあとで、いかにもうんざりしたようにこう言った。

「結局、若い男にはだれだって恋人がいる…習慣からしたって人生からしたって当たり前のことだ。それを禁じるなどはばかげている。ただ、相手がその父親の娘ということなら、たとえ愛人としてもだめだ」

ヴィラサはトランプを切る手をとめて金縁の眼鏡をかけ直し、驚いて大声で叫んだ。

「愛人ですって！　だって相手は独身ですよ。まだ純潔な娘さんです！…」

アフォンソ・ダ・マイアはパイプに葉を詰めていた。その手が震え始めた。そして管理人の方に向き直ると、やはり少し震えはじめた声で言った。

「ヴィラサはわかっていないようだが、息子は、あの女と結婚しようという魂胆だよ…」

ヴィラサは黙っていた。するとつぶやいたのはセケイラだった。

「ないない。いや、間違いなくそれはない…」

しばらく黙ったままトランプは続いた。

しかしアフォンソ・ダ・マイアは次第に不安になり始めた。ペドロがベンフィーカで夕食をとらなくなってもう数週間になる。朝、息子を見かけることがあってもほんの一瞬で、昼食のために階下に降りてくるときにはもう手袋をしていて、喜色満面でそわそわし、馬に鞍はつけたかと奥に向って大声で訊く。それから立ったままで紅茶をひとくち啜ると、走りながら「パパ、なにか欲しいものある？」と訊き、暖炉の上のヴェネツィアの大鏡の前で髭を撫でつけて、上機嫌で外出するのである。そうかと思えば、部屋から一歩も外に出ない日もあった。日が落ちて明かりが灯るころになると、さすがの父親も心配になり、階上にのぼって行くと、息子は両手のひらを頭の下にしてベッドに仰向けになっている。

「どうした？」父親が訊く。

「頭痛だよ」息子がしわがれた小声で答える。

そしてアフォンソは、あの小心翼々とした不安の裏には、手紙に返事が来ないだとか、あの娘が贈った薔薇の花を髪に挿していなかっただとか、そんな理由があるにちがいないと考え、憤然として階下に降りるのだった。

それだけではなかった。ホイストでロバーの合間やお茶のトレーを前にしたお喋りのときに、友人たちが、アフォンソを不安にするような意見を伝えてくることがあった。アフォンソが夏と冬、本と薔薇に埋もれて暮らしているあいだリスボンに住み、噂話に興じている人たちが発信源である。たとえば優秀なセケイラは、ペドロが勉強のためにドイツなり東洋なりに長旅をしないのはなぜだと尋ねてきた。あるいはアフォンソの従弟ルイース・ルナなど、雑談の途中で突然、警察長官が邪魔な奴らを自由に追い出すことができた時代が懐かしいと嘆き始める始末…暗にモンフォルトのことを言っているのが明らかなら、モンフォルトを危険人物だと考えていることも明らかだった。

夏になるとペドロはシントラ[34]へ行った。モンフォルトがそこに家を借りたことをアフォンソは知った。数日後、ヴィラサが血相を変えてベンフィーカに現れた。前日、ペドロが事務所を訪ねてきて、自分の資産状況がどうなっているか、金を手に入れる手だてはあるか訊いてきたのだという。九月になれば成人するから、そうしたら母親の遺産から遺留分が入る旨をヴィラサはペドロに伝えた。

「でも、わたしは気にくわんのですよ。気にくわんのです…」

「なぜだね、ヴィラサ？　あいつには金が必要なんだろう。きっとあの女に贈り物がしたいんだよ…愛とは金のかかる贅沢だ。な

あ、ヴィラサ」

「そうだと良いんですがね、旦那さま。神よ、お助けください！」

しかし、貴族としての誇り、息子の血筋にたいするプライドにアフォンソが大きな信頼を置いていることを知り、ヴィラサの気持ちも収まった。

数日後、アフォンソ・ダ・マイアはついにマリア・モンフォルトを眼にすることになった。ケルーズに近いセケイラの別荘（キンタ）で夕食をとっているときだった。アフォンソとセケイラは見晴台でコーヒーを飲んでいた。すると塀に沿って走る狭い道に、網で覆われた馬が牽く青い四輪馬車（カレーシュ）が入ってきた。小さな緋色の日傘をさしたマリアは、全身に襞飾りのついたばら色のドレスを着ていて、ドレスは隣に座っているペドロの膝を隠している。大きな結び目が胸いっぱいに広がった帽子のリボンもばら色。ギリシアの大理石でできたような澄んで厳かなその顔は、ばら色の色調に包まれ、群青色の眼に照り映えて、ほれぼれするほど見事であった。向かい合った座席に座り、婦人服店の箱に埋もれて小さくなっているモンフォルトは、大きなパナマ帽をかぶり、南京木綿のズボンを穿いて、娘のマントを腕にかけ、膝のあいだには日傘をはさんでいる。三人は黙ったまま、別荘（キンタ）の見晴台に眼をやることもない。そして緑濃く清々しい小道を、四輪馬車（カレーシュ）は車体をゆっくり揺らしながら走り抜け、木の枝の下すれすれをマリアの日傘が通って行くのだった。セケイラはカップに口をつけたまま眼を大きく見開いてつぶやいた。

「いや、なんたる美人だ！」

アフォンソは返事をしなかった。頭を下げてその緋色の小さな日傘を眺めていると、その日傘が今度はペドロの方へと傾いて、全身を覆うほどになる。陰鬱な緑の下で、それはまるで四輪馬車（カレーシュ）を覆うように広がってゆく大きな血の染みのようであった。

秋が過ぎ、厳しい冬がやってきた。ある朝、父親が暖炉のそばで本を読んでいると、書斎にペドロが入ってきた。ペドロは父親から祝福を受けると、新聞を広げてしばらく眼を通していたが、とつぜん父親の方に向き直り、意を決したようにはっきりした声でこう言った。

「父さん。マリア・モンフォルトというお嬢さんと結婚を許してもらいたくて参りました」

アフォンソは開いた本を膝に置いて、厳かな声でゆっくりと言った。

「これまでおまえはお嬢さんのことを話題にしなかったが…人殺しの黒人奴隷商の娘らしいな。本人も〈女黒んぼ商〉と呼ばれているそうじゃないか…」

「父さん！…」

アフォンソはペドロの前に立ちはだかった。家の名誉が受肉したような厳しく冷たい姿だった。

「それ以上言うことはあるか？　恥ずかしくて耳まで真っ赤だ」

ペドロは手に持ったハンカチよりも白い顔で震えながら叫んだ。ほとんど泣き声だった。

「では父さん、覚悟しておいてください。ぼくは結婚しますから！」

怒りにまかせてドアをばたんと閉めるとペドロは出て行った。廊下に出ると父親に聞こえよがしに大声で召使いを呼び、ホテル・ヨーロッパにトランクを運び込むよう指図した。二日後、ヴィラサが眼に涙を溜めてベンフィーカにやってきた。今朝、ぼっちゃんが結婚した。モンフォルトの代理人のセルジョによると、花嫁とイタリアに発つところだという。

アフォンソ・ダ・マイアは昼食のために暖炉の近くに置かれたテーブルにちょうどついたところだった。部屋の中央では日本の花瓶に生けた花が薪の強い炎で花を落とし、ペドロのテーブルウェアのそばにはペドロがいつも取っている詩の雑誌『花冠』が置いてある…アフォンソは真剣な顔つきで黙って代理人の話に耳を傾けなが

ら、自分の食卓用ナプキンをゆっくり広げていった。
「ヴィラサ。昼食は済んだかね？」
代理人はアフォンソの落ち着いた態度に驚いてどもりながら答えた。
「え、ええ、昼食はもう…」
するとアフォンソはペドロのテーブルウェアを指差すと、召使いに言った。
「テイシェイラ。このテーブルウェアは片付けてもらっていい。今後、用意するテーブルウェアはひとつだけだ…さあヴィラサ、座って、座って」
新入りのテイシェイラは一家の息子のテーブルウェアを無関心に片付けた。ヴィラサは座った。これまでベンフィーカで昼食を食べたときと変わりなく、周囲のすべてが完璧で静かだった。ふかふかした絨毯のおかげで召使いの足音さえ響かない。暖炉の火がぱちぱちと陽気な音を立て、磨かれた銀器に金色の光を投げかけていた。冬の青空に輝く控えめな太陽は、乾いた木の枝に降った霜を水晶のように煌めかせている。窓辺では、ペドロの教育のおかげで革命党員（パトゥレイア）になった[36]鸚鵡が、カブラル内閣の大臣たちにたいする罵り言葉をぶつぶつぶやいていた。
アフォンソはやっと立ち上がり、農園とベランダの孔雀をぼんやり眺めた。それから部屋を出るときにヴィラサの腕を取って、老いの恐怖に初めて襲われたかのように、ヴィラサに力を込めて寄りかかり、孤独のなかの確かな友情を感じた。二人は黙ったまま廊下を歩いた。書庫に入るとアフォンソは窓の近くのソファに行って、パイプに煙草の葉を詰め始めた。ヴィラサは頭を垂れたまま、背の高い本棚に沿って、まるで病人の部屋にでもいるかのように抜き足で歩いている。ベランダのすぐそばの一本の大木の枝に雀の群れがやってきてしばらくちゅんちゅん鳴いていたが、それから静かになった。アフォンソ・ダ・マイアは言った。
「それじゃあ、ヴィラサ。サルダーニャ[37]は宮廷から追い出されたんだね？…」
ヴィラサは無意識のうちに曖昧な返事をした。
「そうです。そういうことです…」
ペドロ・ダ・マイアの話はもう出なかった。

〈第2章に続く〉

（1）現代ポルトガル・ポルトガル語ではアクセントのないeの文字は曖昧母音で発音される。したがって、deは、「デ」ではなくフランス語のdeに近い「ド」（あるいは、さらに忠実な音転写を採用するなら「ドゥ」）で表記すべきである。それゆえ、Eça de Queirósは「エッサ・デ・ケイロース」ではなく、「エッサ・ド・ケイロース」（さらに原音に忠実な音転写を目指すなら「エサ・ドゥ・ケイローシュ」）とすべきところだが、著者名としてすでに定着していることから、従来の慣例に従って「エッサ・デ・ケイロース」とした。
（2）ラパ学園
（3）*O Crime de Padre Amaro*、浜崎いとこ訳、彩流社、二〇〇四年。
（4）*O Primo Bazilio*、小川尚克訳、彩流社、二〇〇八年。
（5）*Os Maias*
（6）*O Mandarim*、『縛り首の丘』所収、彌永史郎訳、白水社、二〇〇〇年。
（7）*A Relíquia*
（8）現在のアリアーガ大統領通りにあたり、すぐ近くにジャネラス・ヴェルデス通りがある。古代博物館に近い。
（9）ポルトガル女王として一七七七年から一七九二年まで君臨した。
（10）一七〇六から一七五〇年までのポルトガル王。
（11）リスボン近郊にある町。
（12）したがって一八五一年以来。
（13）テジョ川の河口、リスボンの対岸に位置する小さな町。

(14) 一四八八―一五三九。タンジールの船長にしてインドの総督。
(15) 一四五三―一五一五。ポルトガル領インドの二代目総督。
(16) 一八二二年。リスボン近郊の村カルナシデで、ひとりの農夫が畑のなかに立つ聖母マリアの姿を眼にした奇蹟をいう。ちなみに、この「奇蹟」は、聖母マリアが憲法に立ちはだかるように現れたのだと解釈されて、絶対主義王政の支持者たちに利用された。
(17) 絶対王政主義者だったドン・ミゲル王子は、一八二四年四月、立憲王政を敷いた父ジョアン六世に反発して反乱を起こし、ジョアン六世を数日間に拘束した。その後、ジョアン六世は全権を再び掌握。ドン・ミゲル王子はオーストリアに亡命した。
(18) 三―四世紀のローマの作家。教訓的ラテン詩で有名。
(19) 紀元前六世紀のローマの伝説的英雄
(20) ケルーズはポルトガル王の住まいがあるところ。リスボンの北にある。
(21) ポルトガル王ドン・ミゲルが一八二八年に招集した身分制議会。
(22) ジョアン六世の妻で、ドン・ペドロとドン・ミゲルの母。
(23) 一八二八年ドン・ミゲルが王になると、パルメラ侯爵をリーダーとする自由主義者はポルトで反乱を試みたが、まもなくして、イギリスの船ベルファスト号に乗ってポルトを離れざるを得なくなった（一八二八年七月三日）。一方、スペイン方面へと退却中の自由主義者の一団が、ガリシア地方のア・コルーニャに到着した。このうち一部がこのア・コルーニャでベルファスト号に乗り込み、イングランドの港湾都市プリマスに向った。
(24) パルメラ伯爵をはじめとする穏健自由主義者は、一八二〇年八月二四日の革命精神に忠実な者をジャコバン派（極左過激派）とみなしていた。
(25) ペドロの愛称
(26) ポルトガル国王（在位一七五〇―一七七七年）。
(27) 一八三二年、内戦で自由主義陣営が絶対主義陣営を打ち破った。勝者となった自由主義陣営は、絶対主義陣営の砦となった修道院、修道会を分断、没収、国有化した。
(28) 当時シアード通りにあったカフェ。
(29) 一七九二年に建てられたリスボンの有名な劇場。
(30) 当時シアード通りにあった婦人服店。
(31) リスボンのおしゃれな散歩者が集まる通りのひとつ。現在の「シアード広場（Largo Chiado）」は当時「ロレート広場（Largo Loreto）」と呼ばれ、現在の「ガレット通り（rua Garrett）」が「シアード通り（rua Chiado）」と呼ばれていた。
(32) 当時のリスボン市外区。現在の「チリ広場（praça do Chile）」の東に位置する地区。
(33) ピントはクルザード（ポルトガルの貨幣名）の俗称。
(34) リスボンから二十五キロほどの山腹にある町。リスボン上流社会の人々の夏の避暑地になっていた。
(35) 一八三六年九月九日の自由主義革命を実現した民衆党の党員はパトゥレイアと呼ばれていた。
(36) マリア二世（在位一八三四年―一八五三年）治下のポルトガルは政治的混乱を極め、一連の革命と反革命が繰り返されたが、コスタ・カブラル内閣の「上からの近代化」は自由主義者の反発を招いた。
(37) マリア二世治下の政治家。一八五一年に王家の財務監督官を罷免された。